

チャイコフスキー / 交響曲第5番 ホ短調 Op.64

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840-1893）が「交響曲第5番」を作曲したのは、奇しくもモーツァルトの「40番」からちょうど100年後の1888年夏のことである。その間、オーケストラの分野では文学的標題をもつ「交響詩」などの新たなジャンルも生まれたが、交響曲の伝統は途絶えることがなかった。しかもベートーヴェン以降、楽章間のつながりはいっそう強くなり、終楽章を到達点とするドラマ性を帯びた交響曲が数多く生まれた。この「交響曲第5番」の初期のスケッチにも、第1楽章は運命への完全な服従である、といった言葉があることから、内的な物語が隠されていると考えられる。そのため、第1楽章の序奏でクラリネットが吹き始める主題は「運命の主題」とよばれており、この主題が全楽章をひとつに結びつけ、終楽章で勝利の音楽へと生まれ変わる。第1楽章 アンダンテ～アレグロ・コン・アニマ、ホ短調ほの暗い「運命の主題」による序奏のあと主部に入り、リズムが活性化する。苦悩を抱えた第1主題とほかの主題が組み合わせられ、起伏に富んだ展開となる。第2楽章 アンダンテ・カンタービレ、*コン・アルクーナ・リチェンツァ（*いくぶん自由に）、ニ長調主部は低音の弦の響きに導かれて、ホルンがロマンティックな主題を奏し始める。続いてオーボエから希望に満ちた新しい主題が現れ、ともに発展する。クラリネットの物悲しい調べから中間部に入り、「運命の主題」が鳴り響く。弦のピッチカートで主部に戻り、音楽が大きく高揚したところで再び「運命の主題」が聞こえるが、最後は穏やかな感情となる。第3楽章 ワルツ アレグロ・モデラート、イ長調チャイコフスキーのバレエ音楽を彷彿させるワルツの調べ。伝統的なメヌエットでもスケルツォでもない「ワルツ」を交響曲に組み込んだ。最後の方で「運命の主題」が一瞬間聞こえる。第4楽章 フィナーレ アンダンテ・マエストーソ～アレグロ・ヴィヴァーチェ、ホ長調冒頭の堂々とした旋律は、ホ短調の「運命の主題」をホ長調に変えたものにほかならない。速度が上がり、闘争的な第1主題、下行旋律で始まるなめらかな第2主題のあと「運命の主題」が金管に現れ、活気に満ちた展開の後にも高らかに鳴り響く。終結部も、勝利と喜びの感情の中で「運命の主題」が雄大に曲を締めくくる。

遠山菜緒美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。